

序文

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1966年のゼネラルサーベイ以来約半世紀近くにわたってエジプトで現地調査を継続して来た。ゼネラルサーベイでは、エジプト全土の遺跡と博物館の調査を行い、その結果ルクソール西岸マルカタ南地区の発掘及び周辺調査を行った。マルカタ南地区で約10年間調査を行い、ルクソール西岸クルナ村貴族はかに調査地区を変え今日に至っている。その間1990年に王家の谷・西谷の調査の許可を受け、現在は同地区のアメンヘテプ3世王墓の保存・修復作業を日本国外務省のユネスコ世界文化遺産信託基金の助成を受けて、国際チームで活動している。また1987年にはギザ台地のクフ王の大ピラミッド周辺調査が許可され、電磁波レーダーなどのハイテク機器を駆使して大ピラミッド内に空間を発見し、大ピラミッドの南側で第二の太陽の船のピットなどの発見を行った。その後メンフィス・ネクロポリスで調査を開始し、アブ・シール南丘陵遺跡、ダハシュール北遺跡において物理探査や人工衛星画像解析などのいわゆるハイテク機器による探査を行い数々の遺跡、遺物を発見する成果を挙げた。

こうした40年以上の調査実績は成果として場所ごとの保存修復活動は行えるものの、エジプト全体の文化財の保存・修復など遺跡や遺物の将来に向けた整備の全体像を描く事ができない。

そこで本研究では、これまでの調査の成果をベースに、ユネスコの世界文化遺産であるメンフィス・ネクロポリスの文化財を保存整備計画の策定を目的とした。研究報告集の第1号では、当該地区の保存管理の現状と我々の調査研究の成果の一部について報告したが、本号では、メンフィス・ネクロポリスの各エリアの現状と保存整備の提案および具体例として早稲田大学古代エジプト調査隊が調査を実施しているアブ・シール南丘陵遺跡およびダハシュール北遺跡の保存整備計画案を提示した。

2011年のエジプト革命以降、我々の現地調査も延期を余儀なくされ、治安の悪化等により遺跡の保存は危機的な状況にある。本研究で示された成果が僅かながらも将来のエジプトの復興に寄与することができればと願いたい。

早稲田大学名誉教授
研究代表者 吉村作治